

カタカナコンプレックス

(仮)

第四稿

大岡俊彦

登場人物

桃太郎	(18)
かぐや姫	(18)
金太郎	(26)
浦島太郎	(42)
三年寝太郎	(10)
一寸法師	(65)
おつう	(29)
酒吞童子	(20)
爺	(70)
婆	(70)
天の邪鬼	(28)
竜王	(3000)
乙姫	(27)
お七	(19)
ヤス	(19)
子供A	(7)
子供B	(8)
鬼婆	(65)
赤鬼	(27)
青鬼	(25)
海亀	
雀の女将	
雀の仲居	
花咲の爺	
こぶとり爺	
鬼	(18)
侍	(15)
村人	(15)
浦島一家	(42)
食堂の店主	

○ 桃太郎の村、夕暮れ時

タイトル『昔むかし、ある所に…』

宇宙から、日本列島。

カメラ、降下していく。

関東のどこか、夕暮れ時。

竜が飛んでいる。雷様が太鼓を叩いている。

天狗が飛んでいる。

雲をつきぬける。

地上は農村。

畑のまんなかにいる若者（桃太郎）、

天をおおぐ（つまりカメラ視線）。

上空からここまでワンカット。

切り返して桃太郎の視点。

若い姫（かぐや姫）が空から落ちてきた。

かぐや 「どいてどいてどいてどいて！」

桃太郎 「何何何何！？」

かぐや 「どいてどいてどいて！」

桃太郎 「何何何！？」

かぐや 「どいてどいて！」

桃太郎 「何何！？」

かぐや 「どいて！」

桃太郎 「何！？」

ハイスピード。

桃太郎とかぐやのカットバック。

桃太郎 N 『世界は複雑で、理不尽で、オレが全部を分るには広すぎる。この畑のこと、この村のこと、ここに住む人のこと。それまで俺はその枠から出ようとした。その日、オレは人生でマックスわけのわからないものに出会った』

空から降ってきた彼女を抱きとめる桃

太郎。
ものすごい衝撃波。

ものすごい風で、女の子の裾がめくられてパンツが見える。
ものすごい風で、中年のヅラが飛ぶ。
ものすごい風で、木々が揺れて鳥が飛立つ。

なぜか彼女の胸をつかんでいる桃太郎。
かぐや「なにすんのよ！」
思いつきりビンタ。

画面、フリーズ。
ロックなBGMとともにオープニング。

○ オープニング

小気味よくキャスト、生い立ちを紹介。

桃太郎：婆が桃を拾って桃から生まれ、子供から青年へ成長。

かぐや姫：竹から生まれて成長。多くの貴族のプロポーズを断り、宇宙船に乗って月へ帰る。

金太郎：熊にマウントパンチ&腕ひしぎ逆十字、侍に認められる。

浦島太郎：亀を助けたら竜宮城に連れて行かれ、酒盛り。

三年寝太郎：寝てる。

一寸法師：川をお椀で下る。

おつう：与ひょうを訪ねるが、鶴の姿をのぞかれてしまい、空に飛んでいく。

酒吞童子：ブラインド越しにこっちを見る。

せいぞろいする7人。

タイトル『オトギセヴン』（仮）

○ 桃太郎の家、居間

婆が、インタビューされている（ドキユメンタリー番組風）。

婆 「まあお茶でもどうぞ。これ？畑でとれた大根づけ。うまいよ。」

T 『Q、桃太郎氏について』

婆 「あ。桃太郎。桃太郎ね。うーん、なんていうかな、『桃を割った性格』とでも言おうかね。パカッと割れて、芯がある。

竹より始末が悪いよ頑固もので。」

T 『Q、と、いますと？』

婆 「たとえば…、」

○ 桃太郎の村、昼、回想

桃太郎通りかかると、

子供がふたり、饅頭をとりあっている。

子供A 「放せ！ これは俺のだ！」

子供B 「むしろ俺のだ！」

子供A 「逆に、俺のだ！」

子供B 「微妙に、俺のだ！」

子供A 「分かった、交渉しよう。今回は俺に譲って。こないだの貸し、今返してよね。」

子供B 「僕のメンツも考えてよ。むしろ僕の場合はどうでもいいんだ。ウチの一族のメンツを考えてくれよ。」

桃太郎、話の成りゆきにげんなり顔。

子供A 「親を出すのかよ。」

子供B 「じゃ、ハルカちゃんの好きな子、知りたくない？ 取引きだ。」

子供A 「：7・3。」

子供B 「間を取って6・4。」

子供A 「間とってないじゃん。」

子供B 「じゃそれをオプションでつけるから、まんじゅうはこちらに。」

子供A 「他の方法論を検討する余地はないかな。」

子供B 「妥協ラインは6…4。」

桃太郎、イライラしてくる。

桃太郎 「納得いかーん！！！」

刀を抜いて、饅頭をまっふたつにする。

桃太郎 「半分半分！ 大同小異！！ 細かい

所気にすんな！」

子供たち 「あ、はい。」

桃太郎 「うむ！ …スッキリ！」

子供たち、なんだか迷惑そう。

○ 桃太郎の家、居間

婆 「…とまあこんな感じ。」

○ 寺子屋、回想

黒板の『 $1/3=0.3333333333\dots$ 』に

桃太郎キレる。

桃太郎 「納得いかーん！！ 残りの1は

どこへいくんだ！ どこ！」

机をひっくり返す。

○ 桃太郎の家、居間

婆 「まあ、妥協したり、嘘をついたり、ど

っかで折り合いつけながら生きていくのが

人の世つてもんだがね。あの子は納得いか

ないらしい。あの子はどっか人と違う所が

あるからね。」

T 『ていうか桃から生まれてますからね。』

婆 「あー、それはまだ秘密にしてるのさ。」

T 『Q、なぜ？』

婆 「んー…、面白いから。」

○ 桃太郎の村、昼

家の前の、狭い畑を耕す桃太郎。そばに爺。

桃太郎 「じじい、今年の葉っぱ、育ちが悪い。

このままじゃひよろひよろのしか出来んぞ。」

爺 「ひよろひよろ♪」

フリをつけて踊る。

桃太郎 「土も痩せたままだし、肥料買う金もねえし。このままじゃやばいよ。」

爺 「やばいやばい♪」

桃太郎 「どうすんだよ？」

爺 「じゃおめえさん、自分の息子がひよろひよろで今やばいからといって、ちよん切るか？ めし食う金がねえからって埋めちまうか？ 命扱うってのは、ちよつとずつが極意。もつと気長にやれい。少なくとも、わしはそうやってお前さんを育ててきたよ。」

桃太郎 「…つてもさあ、年越すだけの食料できねえよ。どうすんだよ正月。」

爺 「ん〜、ダイエツトだなり♪ …あつ。」

爺、バタリと倒れて動かなくなる。

桃太郎 「ハッ、脈拍と呼吸が止まっている！

おじいー！！」

突然起き上がる爺。

爺 「わしの死んだフリも名人級じゃのう。

誰か取材に來ないかのお。」

桃太郎 「また死んだフリかよ。もう飽きたよ。」

爺、もう一度死んだフリ。桃太郎無視。

年頃の娘、お七がやってくる。

お七 「桃太郎ー！」

桃太郎 「お七。」

駆けてくるお七。

桃太郎 「ハア…。今日も可憐だ。」

隣の息子（ヤス）にすれ違い、合図。

そのまま駆けてくる。

ハイスピードのキラキラした画。

爺、そのフレームに割りこもうとする。

お七 「ね桃太郎、これかわいくない？」

髪飾りを見せる。

桃太郎 「今日も可憐だ。」

お七 「あとこの丈短すぎないかなあ。」

パンツ見えちゃうよね。ていうか見る？」

桃太郎 「今日も可憐だ。え？」

桃太郎、ドキドキして下をのぞこうとする。

お七 「もう、桃太郎のえっち！」

はりたおす。

地面にめりこむ桃太郎。顔面土だらけ。

お七 「それより、立て札みた？」

桃太郎 「今日も可憐だ。え？」

立て札に集まる村人。

立て札『鬼退治メンバー募集

露払い、先鋒、次峰、太刀持ち 当方ボーカル』

お七 「鬼退治よ鬼退治！ お侍さん達がメンバー募集してんのよ！ お城勤めしたいって言ってたじゃん！ チャンスよ！」

爺 「んー？」

桃太郎 「…いつか村を出たいと思ってた。

もう畑仕事はおじいには辛いだろ。」

爺 「…お前、そんな事考えてたんか。」

気配。

気づく桃太郎。振り向く。

桃太郎 「なんだ？…」

お七 「え？」

お七、爺は気づかない。

桃太郎 「あそこ。」

突然、血まみれの騎馬武者が森から転がり出てくる。合戦の痕。

侍1 「逃がすな！」

侍2 「こつちを固めろ！！」

侍たち、鬼を追っている。鬼7、8人。

鬼 「アホか！ こつちじゃー！！」

金棒を振り回して武者を倒していく鬼。

侍3 「待て！ 鬼ども！！」

桃太郎 「鬼？」

走る『鬼』たち。

桃太郎 「あれが鬼？…どう見ても人ではないか。」

追われた3人の鬼、隣の畑へ。追う武者。

畑を踏み荒らしていく。

お七 「畑がメチャメチャ！」

桃太郎 「なにすんだあいつら！」

後方から鬼15人、武者15人ぐらい

登場。互いに戦闘の跡。

桃太郎 「お七、ヤバイ、隠れてろ。」

爺 「ワシは死んだフリでごまかす。」

お七 「桃太郎は！」

桃太郎 「加勢する！」

お七 「どっちに！」

桃太郎 「畑をメチャメチャにしない方！！」

ツカツカツカとあぜ道をきちんと通って、鬼のところへ。

桃太郎 「コラお前ら何すんだまだツボミつけ

たばつかの○○(ナスビとか)に！！」

鬼1 「なんだコラーラー！」

一発殴る。ひるまない桃太郎。

桃太郎 「おまえこそ何だラーラー！」

一発殴る。

空中で3回転する鬼1。ハイスピード。

空中でケリをいれる。ものすごくふつ

とぶ。

陣頭指揮していた隊長(金太郎)、気づ

く。次々に鬼をふつとばす桃太郎。

侍4 「なんだあの農民！」

金太郎 「待て。こんな辺境にまだ見ぬ若者が。」

馬から降りて上着を脱ぐ。

『金』とかけた腹掛け。

金太郎 「いつもの。」

部下、まさかり二本を渡す。

左右にまさかりを構える。

3対1で囲まれている桃太郎。

金太郎「助太刀いたす！」

金太郎、見事なまさかり裁き。

桃太郎といひコンビ。

(BGMに合わせた殺陣。ミュージックビデオのような)

鬼が火炎放射器を出す。

炎をよける桃太郎。後ろはトウモロコシ畑。

炎に包まれたトウモロコシが、次々にポップコーンになる。

うまく炎をかわし、鬼をぶっとばす桃太郎。

金太郎と背中合わせになる。

金太郎「なかなかやるな青年。」

桃太郎「一体何だこれは？」

金太郎「鬼だよ。おふれを見なかつたか？」

囲まれるふたり。突破しようとする桃太郎。

一方、お七は鬼2人に囲まれている。

鬼2「なあ姉ちゃん、ひとり？　ひとり？

茶ーしばかへん？　うわ！　めっちゃカワ

イイ。ちよつと小指見して。うわ、赤い糸

ついでる！　その先は：俺やーん。これ運

命やで。な、運命の茶しばこ。」

お七「意味分ないんだけど。しばくって

何？」

鬼3「おい、ナンパでけへんねやったらさらってまえや！」

後ろから鬼2の股間をつかむ桃太郎。

鬼2「いたいたいいたい！」

桃太郎「おまえらお七に何する：あ。」

ヤスがお七をかばっている。

お七、ヤスの手を握っている。

桃太郎「あれ。：君らそういう仲だっけ。」

ヤス 「気づいてなかったのか？ めでたい
奴だな。」

桃太郎 「ああ、そう。あ、そう。」

鬼2 「なにすんねん！」

鬼2を殴る桃太郎。

空中で5回転する鬼2。ハイスピード。

その間に、鬼2のくわえ煙草をとって、
火を消して、また鬼に返す。

次々に鬼をふつとばす桃太郎。顔が悲
しい。

再び火炎放射器で攻撃してくる鬼。

桃太郎、炎に腕を焼かれながら、鬼を
ぶん殴る。空中で回転する鬼。

回転するたびに炎がトウモロコシに当
たり、次々にポップコーンに。

用水路で腕を冷やす桃太郎。

ジューっという痛そうな音。

鬼、全員しばられている。

侍たち、あと片付け中。

それを見ている金太郎、桃太郎。

金太郎 「青年。拙者、坂田金時と申す。子供
の頃から金太郎と呼ばれている。名は。」

桃太郎 「：桃太郎。」

金太郎 「ひとつ質問。：構えて。」

金太郎、まさかりを構える。

桃太郎は鋤を剣代わりに。

金太郎 「左からも右からも、こうまさかりが
襲ってくる。一本の刀じゃ左右同時は防げ
ないよね。さあ、どうする？」

桃太郎 「バカじゃねえのか？ 真ん中が空い
てるから、真ん中を打つ。」

金太郎 「：ハハハハハ！ 真理だ！」

まさかりで、立て札を一気に打ち込む。

立て札『鬼退治メンバー募集』

金太郎「明日、隣の城下町で武術試合をやる。

男なら来い。」

馬に乗って去ってゆく金太郎。

○ 桃太郎の村、夕方

めちやめちやになった畑で途方に暮れる爺。

爺 「葉がよれてたって、一人前になった
かも知れんのに♪」

全部踏み荒らされている。

桃太郎 「…。」

立て札。

ヤスの家へ入ろうとしているお七。

めちやめちやになった畑。

桃太郎 「俺、侍になる。」

爺 「…村、出んのか？」

桃太郎 「…実際、食うもなくなったじゃね
えか。」

爺 「婆さんが寂しがる。ダイエツト仲間
が減るよ。3人で死んだフリして年越そう
よ。」

桃太郎、散乱した葉っぱを片付けよう
として、ふと上を見る。

若い姫（かぐや姫）が空から落ちてく
る。

かぐや 「どいてどいてどいてどいて！」

桃太郎 「何何何何！？」

かぐや 「どいてどいてどいて！」

桃太郎 「何何何！？」

かぐや 「どいてどいて！」

桃太郎 「何何！？」

かぐや 「どいて！」

桃太郎 「何！？」

空から降ってきた彼女を抱きとめる桃
太郎。ものすごい衝撃波。

ものすごい風で、お七のすそがめくれ
てパンツが見える。

ものすごい風で、ヤスのヅラが飛ぶ。
ものすごい風で、木々が揺れて鳥が飛
立つ。

なぜか彼女の胸をつかんでいる桃太郎。

桃太郎「……。」

かぐや「なにすんのよ！」

思いつきりビンタ。

桃太郎「て、いうか……。」

かぐや、空中で一回転して着地

(ただものではない体術)。

かぐや「命を救ってくれたことには感謝しま
す。そなた名は？」

桃太郎「……桃太郎。」

かぐや「かぐや姫と申します。ていうか自分
一人でも助かったと思うけど。……しかしも
お最低だわ！」

桃太郎「なにが……、ってかぐや姫って、あ
の!?!」

かぐや「ああ、すみません結構有名人なんで。
……いろんな貴族とウワサになっちゃったし、
帝の軍隊止めちゃったし。あ、写真は勘弁
してね。」

周りに人が集まり始める。

村人1「かぐや姫！ 瓦版でみたよ！」

村人2「本物だよ！」

村人3「まじで？」

みんなケータイのカメラで撮ろうとす
る。

村人4「なんで降ってきたの？ 月へ帰った
んじゃねえの？ 帝をフツたって話じゃ。」

桃太郎「……。」

グイッとかぐやの手を引く。

かぐや「何すんの！」

桃太郎「目立つだろ。ウチに来い。」

かぐや「私の手を気安く握るなんて……！」

もう一回ビンタ。桃太郎は動じない。

かぐやのお腹がグーと鳴る。

桃太郎「飯も食ってけ。おバアのめしはう
めえぞ。」

○ 桃太郎の家（中）、夜

桃太郎、かぐや、爺、婆がいろりを囲む。

爺 「ほいでよ、鬼のやつらがバチーンバチーンバチーン！そこへ現れた我らが桃太郎！いよっ待ってました！とう！おりや！ボヨンボヨンボヨン！」

桃太郎 「全然何言ってるかわかんねえよ。」

爺 「そしてワシは死んだフリ！」

かぐや 「おじいさん！おじいさんが死んじやった！」

爺 「どうだい？ワシの死んだフリの名人級！！！」

笑う婆、かぐや。

婆 「しかしまさかこんなセレブがウチに来るとはねえ。アンタの記事全部読んでるよ。」

あとで サインもらっぺいいかい？」

女性週刊誌『生娘自身』とか、

いっぱい積んである。

かぐや 「すいません色々して頂いて。パパラツチも来るだろうし、ご迷惑かけないうちに明日出ます。」

婆 「出るってどこへ？」

かぐや 「(サインしながら) 鬼が島でも行くのかな。」

爺 「鬼が島！」

かぐや 「鬼の宝物のなかに、天の羽衣があるって聞いたんで。月の使者とかがまた来ちゃうと、騒ぎが大きくなるんで、ひとりで帰ろうかと思ってます。」

桃太郎 「ていうか月へ帰ったのでは？」

かぐや 「テへ。途中で落っこちちゃった。」

爺 「一人じゃ危ないだろ、こいつ鬼退治いくからボディーガードに丁度いいよ！」

桃太郎 「鬼じゃねえだろ。どうみても人間だった。みんな誤解してんじゃねえのか？」

婆 「戦が起きるのかい？」怖がる。

桃太郎 「…起らないよ。」

桃太郎、立ち上がって障子をあける。
外で村人たちがいっぱい聞き耳をたて
てる。

桃太郎 「帰れよお前ら！」

村人1 「オイ桃太郎が鬼退治にくっついてさ！」

桃太郎 「退治じゃねえっての。」

村人2 「鬼達の悪さ、知ってつか。」

村人3 「夏になると夜中に出てくんだよ。パ
ラリラパラリラって。」

× × ×

想像図：鬼達が改造馬に乗ってローリング族。

声で『パラリラパラリラ』って言う。

特攻服みたいの着て集結、

『パラリラパラリラ』って言う。

村人4 「しかもあいつら、納豆燃やすんだよ。」

想像図：納豆をたき火にくべる。

鬼1 「うわくっさ！ 中年の足の臭いやで
これ！」

鬼2 「おえーこの世の地獄！」

付近の住民大迷惑。

かぐや 「それはひどい！」

村人5 「とにかく傍若無人。動物柄のシャツ
着るし。」

想像図：食堂で

鬼1 「なんじゃコラこんな真っ黒な出汁の
うどん食えるかー！ー！」

鬼2 「うどんは透明やろー！」
うどんをひっくり返す。

鬼3 「そこでボケンかい！ それかつっこ
め！ ホラ、つっこみーや！？」

店主、おろおろ。

鬼3 「これやからボケとツツコミでけん土
地は！」

× × ×

村人1 「今年の米の出来が悪いのもあいつら
のせいだ。」

村人2 「俺の顔が悪いのもあいつらのせいだ。」

桃太郎 「それは関係ないでしょ。束ねてる頭がいるんなら、そいつと話してみるよ。」

○ 桃太郎の村、早朝

家の前で別れる、桃太郎とかぐや、爺婆。

○ 桃太郎の村が見える街道、朝

桃太郎とかぐや、歩きながら。

桃太郎 「ていうかなんでついてくんだよ。」

かぐや 「鬼が島の場所分かんないんで。退治しにいく人に聞きにいくの。」

桃太郎 「行くのかよ。危ないぞ。」

かぐや 「昨日は戦にならないっていったじやん。」

途中、お七とヤスが歩いているのが竹やぶから見える。

右腕の火傷の跡が痛い。

桃太郎 「…。」

かぐや察して、いたずらっぽく、

かぐや 「スキあり！」

小刀で突く。桃太郎、あっさり受ける。

桃太郎 「…。」

かぐや 「…スキあり！」

小刀で突く。桃太郎、あっさり受ける。

かぐや 「スキあり！」

小刀で突く。桃太郎、あっさり受ける。

色々攻撃。全部受ける。

ちよっとくやしいかぐや。

かぐや 「あ。こんなトコに竹が。」

手を地面にかざすと、

ニユーっと竹がのびてくる。

小刀で切って竹槍をつくる。

桃太郎 「なんだそりゃ。」

かぐや vs 桃太郎。

身軽な体術のかぐや。

一本気な桃太郎の剣を歩法で幻惑。

桃太郎「結構やるな。」

かぐや「桃太郎もなかなかやるじゃん。」

すばやい攻防、一旦距離をとるふたり。

桃太郎「驚いた！…お前武芸の心得が。」

かぐや「まあね。それと、お前じゃない、かぐや姫。」

桃太郎「ん？、自分で姫っていうの、おかしくない？」

かぐや「たしかにアホっぽいかも。じゃかぐや。」

桃太郎「姫つつつてもかぐや竹取んトコの家じゃん。庶民じゃん。」

かぐや「月の姫なんです！」

桃太郎「かぐや庶民。」

かぐや「姫です！」

桃太郎「ウソツキー。」

かぐや「(かみつくぐらいの距離で)嘘じゃないもん！嘘じゃないもん！！」

桃太郎「そんなに怒らなくても。」

かぐや「嘘じゃないの。…嘘は大嫌いなもの。」

桃太郎「(気押しされ)：俺も嘘はキライだが。」

かぐや「よかった。仲間だね。」

桃太郎「？」

かぐや「ていうか！ 昨日私の胸触ったよ

ね？ 思い出した！ あんたなんか仲間じ

ゃない！ 敵よ、敵！」

桃太郎「どっちだよ。」

かぐや「どっちでもない！」

桃太郎「ハッキリしてくれ。納得いかん。敵の味方。」

かぐや「じゃ敵！」

桃太郎「敵か。(剣をぬく)」

かぐや「冗談！ 仲間ということにしとく。」

桃太郎「なんだ冗談か。」

かぐや「なんか桃太郎アンタちよっとズレて

るよ？」
桃太郎「？（ズボンとか、毛とかを気にする）」
かぐや「…それじゃなくて。ホントバカじゃないの？」

○ 城下町、午後

人通りの多い都会。城が見える城下町。
様々な人が行き交う。

桃太郎「スゲエー。これが都会か！ 都会スゲー。」

かぐや「キョロキョロしないの！ 田舎者っぽい！」

桃太郎「しかし、複雑だ。…複雑すぎて目が回る。」

かぐや「あ、スタバ出来てる！」

その先、試合場。

猛者が山になってのびている。

その上にどっかと座っている金太郎。

金太郎「来たか！ 桃太郎！」

かぐや、人々に囲まれサイン攻めに合っている。

はぐれた桃太郎、未だキョロキョロ。

金太郎「桃太郎。俺の魂をふるわせる、歴史的ベストバウトが出来るのはお前だけだ！ いざ勝負！！」

桃太郎「(通行人に)今日お祭りでもあるんですか？」

金太郎「聞けよ！」

桃太郎「おう、金ちゃん。なんかスゲエな都会は！…あれ？ 武術の試合は？」

金太郎「見ての通りだ！ どいつもこいつも口先ばかり達者で骨がない！ 鬼に挑もうという勇氣すらないわ！」

桃太郎「…その鬼のことなんだけど。」

金太郎「何？」

桃太郎「金太郎、あいつらホントに鬼だと思ってるの？」

金太郎 「は？ ホントに鬼だよ。」

桃太郎 「あいつら、人間だぞ。」

金太郎 「何をバカな！ だってあいつら凶々しいしヘンな服着てるしヘンな言葉だし！

『ナンデヤネン』『ソナアホナー』とか言うんだぜ？」

桃太郎 「同じ事務所だからじゃないの？」

金太郎 「なるほど。いや、鬼は鬼でしょ！」

桃太郎 「頭のやつはなんていうんだ。」

金太郎 「酒呑童子。」

桃太郎 「酒呑童子。：その酒呑童子と話をしたい。侍になる為にはあいつらの悪さをやめさせればいいんだろ？」

金太郎 「その通りだが：。」

桃太郎 「お互いを知らないでケンカするのはごめんだ。罪があるなら裁きの場に連れていくべきだ。それならスッキリするだろ。」

金太郎 「お前キツチリしてるな。」

桃太郎 「うむ。」

金太郎 「変な性格だな。」

桃太郎 「そんな事はない。」

金太郎 「そうか？」

桃太郎 「うむ。」

金太郎 「：。」

試合の場所の柵を、侍が閉めている。

金太郎 「ちよつと！ まだ終わってないよ！

何してんの！？」

侍5 「5時なんで閉めます。明日の予約は9時からですんで、使用する場合は申請書出して下さい。」

金太郎 「そんなバカな！ これから鬼退治つて時に！ あと、頼んだ物資は！？」

侍5 「はい、そこに。」

リュックひとつ。

金太郎 「コレだけ？ 頼んだものと全然違う！」

侍5 「みなさんの税金ですから、ムダに使わないで下さいね。」

金太郎「なんだこの仕打ちは！」

侍5「まだ聞いてません？ 貴方への援助は打ち切りになりました。」

金太郎「何故！？」

侍5「昨日の大立ち回りの件ですが、あれは誰の指示でもなく、あなたの独断です。これ以上もめ事を起こしたくないとの上の判断です。」

金太郎「でも目の前で鬼に家を焼かれ家族を殺される人が続出してではないか！ それでも鬼退治する気あんのか？！」

侍5「鬼退治するのは、あなた方業者さんでしょ？ では。あ、申請書は9時まで。」

無然とする金太郎。

金太郎「どうやら、俺とお前の2人で鬼退治だな。」

桃太郎「侍は来ないのか？」

金太郎「：酒呑童子は暴れん坊だが頭のいい奴でな。さらった女や金品を侍の上の方に渡しているらしいんだ。それで侍達も事を大きくしないフリだ。」

桃太郎「(手で図を描こうとして)？：複雑だな。」

金太郎「：とにかく、俺達が鬼が島へ行く事に変わりはないさ。」

桃太郎「いや、もう一人：あれ？ かぐや？ うわ！」

後ろを振り向くと、かぐやの周りに黒山の人だかり。かぐや超困っている。カメラ小僧や、プロポーズする人までいる。

桃太郎「とう！」

その人混みの中にムギューーとムリヤリ入る桃太郎。

かぐやを連れ出してくる。

桃太郎「このかぐやも行くって。」

金太郎「え？ あれ？ かぐやって：かぐや

姫さんスか？！ え、護衛の方とかは：？

今日はお忍び？」

かぐや「一人ですよ。天の羽衣とりに鬼が島

行きたいんですけど。」

金太郎「でも、お姫さまには超危険ですよ！」
かぐや「(笑顔で)ムカツ。」

竹をニューと延ばして、金太郎にかか
る。

かぐやS.A 金太郎。

力で押す金太郎、しなる竹。

宙に舞って力をいなすかぐや。

金太郎「なんと！ 戦力になるとは！ てい
うか、ぶっちゃけ強い！」

周りの人々、ケータイで写真撮りまく
り。

かぐや「みなさん、私をお姫様扱いし過ぎな
のよね。」

金太郎「…とりあえず、三人か。行こう。」

金太郎、小さなリュックを担ぐ。

○ 道中、夕方

かぐや「で、鬼が島はどこにあるの？」

金太郎「俺も知らん。ていうか誰も知らん。」

かぐや「じゃどこへ向かってるの？」

金太郎「竜宮城。」

桃太郎「竜宮城？」

金太郎「海の主、竜王さまが地下に住んでい
るのだ。竜王さまは、海の事ならなんでも
知っている。」

かぐや「えー、思ったよりタイヘンそう。ス
グ行けると思ったのに。」

桃太郎「そんな簡単にいくと思ってたのか？

かぐや意外とバカだな。」

かぐや「バカってなによ！ バカって言う方
がバカですー！」

桃太郎「バカとはなんだ！！」

かぐや「桃太郎がいったんじゃん！」

金太郎「まあまあケンカするなよ、恋人同士
で」

ふたり「はあ？」

金太郎「桃太郎、どうやって口説いたの？ 俺、かぐや姫の超ファンなんだよ。」

かぐや「ありえない！ 失礼な！！」

桃太郎「恋人？ 俺の恋人は…」

桃太郎、お七を思いだす（こっちに走ってくる。ヤスと手つないでる）。
すぐ落ち込む。

桃太郎「そんなのいないよ。」

○ 鬼が島内アジト

洞窟のアジト内。悪の巣窟のような内装。ボスの酒呑童子を中心に、天の邪鬼、赤鬼青鬼姉妹などが宴会中。

鬼4 「酒呑童子様！ またピチピチのコさらってきましたぜ！！」

酒呑童子「オウ。今度はどんなコや。」

鬼4 「裸にしてみましたよか？」

酒呑童子「待て。思いついた。全員、水着にせえ。それと、番号札をつける。」

鬼4 「え？ それは…。」

酒呑童子「オーディションや。若いコ並べてオーディションするんや。ハイポーズとつて、とか彼氏いるの？とか、仕事とるためなら、分かってるよね？ とかするんや。ワハハ。」

鬼4 「ワ、ワルや、ホンマモンのワルや…。」

× × ×

女の子（50人くらい）、

全員水着で並ばされる。

酒呑童子「ハイ、じゃ自己紹介お願いします！」

1番のコ（乙姫）、いやがるが手下の鬼にこづかれる。

乙姫 「エントリーナンバー1番、乙姫です。」

酒呑童子「乙姫？…、聞いた事あるな。誰やったっけ。」

○ 海岸

海岸に、ぼろぼろになった巨大海賊船が打ち上げられている。

その前で、漁師風の中年太りのおっさん、浦島太郎が呆然としている。

浦島 「あれー。：おっかしいなー。あれー。」

そこへ桃太郎一行が通りかかる。

浦島 「あ、すいません。今日は何年の何月何日ですか？」

桃太郎、今日のスポーツ新聞を渡す。

ちなみに一面の記事は『翁、おむすびを追う！』。

浦島 「えー！ マジで！ じゃ、300年も経ってんじゃない！ 道理で街も海岸も、俺の船もすっかり変わってる筈だよ！ ヤバイよこれ！」

桃太郎 「？」

浦島 「旅の人聞いてよ！ 不思議な話でさ！ 魚に例えると長生きなマンボウ？

あ、俺浦島太郎っていいいます。その船で海賊やってまして、魚に例えるとマグロの力ブトみたいなもんだね、で、さっきまで竜宮城ってところ行ってきたんだけど、」

桃太郎 「竜宮城！」

浦島 「そこはさ、ちよースゴイキャバクラでさ、カワイイ子ばっか！ 魚に例えると鯛やヒラメみたいな。」

回想…竜宮城大ホール。

踊る乙姫、カワイイ子たち。

ボトルを入れた浦島、モテモテ。

浦島 「で…」

金太郎 「その竜宮城って、どこにあるんですか？」

浦島 「え？ …つと、どうだっけ？ ああ、亀に乗って。」

桃太郎、その辺のミドリガメの上に乗

って海へ向かおうとしている。

浦島 「それは無理でしょ。あ、そいつだよ
そいつ。」

指さした先に、海亀。

海亀 「たいへんです浦島太郎さん！」

浦島 「ひどいよ！ 三百年もたってんじや
ん！ ビデオの延滞料ヤバイよ！ ていう
か、家、ないよたぶん俺！」

海亀 「それどころじゃないですよ！ 乙姫

さまがさらわれたんですよ！！」

浦島 「誰に！？」

海亀 「鬼たちに！」

桃太郎 「鬼？」

反応する桃太郎達。

○ 海中

海亀（1mくらい）の背中にむりやり
全員乗っている。

浦島 「ちよつと狭いよ！ 魚に例えるなら

しじみぐらい狭いよ！」

海亀 「亀です！ しかも、しじみ、魚じゃ
ないし！ ていうか浦島さんいつも魚に例
えますね！」

他の人たちは息が苦しくてガボガボ。

○ 竜宮城前

海底に巨大な空気の泡があって（SM I
みたいな）、その中に竜宮城がある。

一行、門前まで来る。

竜宮城から煙があがっている。

桃太郎 「鬼って何人ぐらい？」

海亀 「ざつと百人は。」

金太郎 「百？」

浦島、ひとりダッシュ。桃太郎、続く。
かぐや、金太郎、やむなく後を追う。

○ 竜宮城、玄関前

見張りの鬼たち。

突進してくる浦島と桃太郎。

浦島 「乙姫をどこへやった!？」

鬼5 「なんじゃお前ら!？」

見張りをカンフーでしばく浦島。

見かけはへばいおっさんなのに、めっちゃ強い(「ムトウ」「カンフーハッスル」のような)。

ふつとばされた鬼が泡の外まで出て、溺れそうになって泳いで帰ってくる。

かぐや 「つよ…。」

一行、内部へ突入。

○ 竜宮城内、大ホール

そこは大ホール。4階の吹き抜けで、天井枚数が2、3、4階にある。

1階の中央に大ステージ、脇に巨大な(人間より大きい)酒瓶。

席数100以上の大バコである。

バーンと扉を開けると、100人の鬼。侍部隊がのびている。

鬼6 「なんや?またお客さんか?」

4階のVIPルームから火が出ている。

浦島 「あの夢のようだった竜宮城になにすんだお前ら!！」

鬼6にとびげり。乱闘に。

浦島 「魚に例えると、お前ら雑魚だな!」

桃太郎も集団に突っ込み、一人の首根っこをつかむ。

桃太郎 「落ち着いて、話がしたい。君らはホントは鬼じゃないんだろ?」

鬼7 「ハア?」

桃太郎 「君たちの頭はどこだ?」

鬼7 「アタマはここですー。」

自分の頭をさす。

桃太郎 「いやその頭じゃなくて。」

鬼7 「ワシは下っ端とでもいうんけ！」
殴られる桃太郎。桃太郎キレる。

桃太郎と浦島が鬼達をちぎっては投げ、
ちぎっては投げ。

数の多さにびびるかぐやと金太郎。

かぐや 「ちよっと：逃げていい？」

金太郎 「うしろ、閉められた。」

後方の扉のかんぬきをかける鬼たちと
囲まれるふたり。

かぐや、金太郎 ^s 鬼たち。

○ 竜宮城内、VIPルーム

出火している部屋内。

軍団のリーダー、天の邪鬼（ビジュアル系）がいる。

鬼8 「火消せ火！」

鬼9、ボトルを口にふくみ、ブーツと
吹きかけると更に炎。

天の邪鬼 「アホそれウオッカや。」

下の騒ぎが聞こえてくる。

天の邪鬼 「なんや…？ 騒がしいな。」

○ 竜宮城内、大ホール

ステージ上に浦島追いつめられている。

浦島 「お兄さん！ スイッチスイッチ！」

桃太郎 「これ？」

ステージ脇のスイッチを押してみる桃
太郎。

ステージから花火が出て、鬼たちの股
間を焼く。

鬼10 「あつあつあつ！」

浦島 「いいぞ！ それと、それ！」

次々にスイッチを押す桃太郎。

ポールダンス用のポールが下から出て
きて、鬼たちぶつかり、上から降りて
きた空中ブランコに頭をぶつける。

浦島、おしぼり器を開けてあついおしぼりを投げつける。

鬼11 「あつあつあつ！」

一方、かぐや、2階へおいつめられる。桃太郎、フォローに入る。

ジャッキーチェン映画のような、二階席から落したり、二階の角から角へ飛び移るなどの立体的なアクション。

桃太郎 「いいぞ！ かぐや、俺の考えてる事分かっているみたいだ！」

かぐや 「私についてきた男、珍しい！」

コンビの呼吸のいい桃太郎とかぐや。

鬼12 「うお！めっちゃかわいいコおんで！」

鬼13 「さらってたらボス大喜びや！」

かぐや 「しかし、数多すぎ！というか、今さらわれたら自動的に鬼が島にたどり着けるのでは。さらってさらって。」

迫ってくるいやらしい手つきの鬼達。

かぐや 「やっぱ生理的に嫌！」

かぐやの竹槍が度重なる打撃で折れる。

かぐや、手を地面にかざす。

しかし、生えてきたのはワカメ。

かぐや 「何これ！？嘘！？」

何回やってもワカメやサンゴが生えてくる。

かぐや 「海だから？」

わらわらと鬼達に囲まれるかぐや。

桃太郎 「かぐや！！」

連れ去られるかぐや。

一方、金太郎と鬼たち。

鬼14 「ハイボトルはいりまーす！」

テーブルのボトルの酒をかける。目に入る。

金太郎 「ちくしょう！ 目が…」

よろめいて下がる。

うしろのソファーにぶつかる。

少年（三年寝太郎）が寝ている。

寝太郎「ご仁。右、左、左と体をかわせ。」

金太郎「何？」

まだ目が見えない。

寝太郎「ホラ、来るぞ！ ハイ右、左、左！」

金太郎、全部逆にかわして三発とも殴られる。

金太郎「あつっーっー。」

寝太郎「全然違う！ 次、左、右、右！」

鬼の攻撃を左、右、右とうまくかわす。

寝太郎「バンザイ、土下座、握手。」

後ろからのふたりを同時に手刀で倒し、前から来たのを下にかわして相手はつまづいてころび、最後握手から投げ技が炸裂。

金太郎「誰？」

寝太郎「うるさくて寝られやせん。ホイ、正面から来た鬼二人をまとめて挟むビシタ。」

浦島におしぼりを投げつけられた鬼が、空中におしぼりを。

金太郎「な、なにものですか？」

寝太郎「三年寝太郎。せっかくここで三年寝てたのに。」

金太郎「え、天才軍師として有名な、あの寝太郎先生！ 百年の先を読み、千里の先まで知る男！」

寝太郎「いいから寝さして。後ろのバトンを受け取って、ハイ。」

金太郎、リレーのバトンを受け取るポーズ。

浦島におしぼりを投げつけられた鬼が、空中におしぼりを。

そのおしぼり、トスつと金太郎の手に。

金太郎、目をおしぼりで拭く。

突如、鋭い口笛が。

4階の天井に敷敷に、

かぐやをとらえた天の邪鬼。

全員、硬直。

天の邪鬼「諸君、そこまで。なんやずいぶん
と鬼なめた真似してくれはりますなあ。」

桃太郎「お前が酒呑童子か！」

浦島「乙姫を返せ！」

金太郎「鬼が島はどこか教えろ！」

3人、同時に言うので訳分からぬ。

それに気づいた3人、ためらってまた

桃太郎「お前が酒呑童子か！」

浦島「乙姫を返せ！」

金太郎「鬼が島はどこか教えろ！」

と同時に言う。

天の邪鬼、指揮者のように、順番に三
人を指差す。今度は順番に言う。

桃太郎「お前が酒呑童子か！」

浦島「乙姫を返せ！」

金太郎「鬼が島はどこか教えろ！」

天の邪鬼「返事したるわ。ノー、ノー、そして
てノー。このコの命惜しかったら武器捨て
え。」

部下、かぐやの喉元に刀を突きつけて
いる。

桃太郎たち、それぞれ武器を捨てる。

かぐや、暴れる。

天の邪鬼「おとなしくしてえや。」

一発顔を殴る。まだ暴れる。何回かビ
ンタ。

桃太郎「かぐや！」

かぐや「親にもぶたれた事ないのに…！」

天の邪鬼「フン…。お前ら、帰るえ。」

鬼15「こいつらボコボコにせえへんのです
か？」

天の邪鬼「今見てたやろ。こいつら強い。負
けそうなのはこっちや。」

1階の鬼達、4階へあがっていく。

桃太郎、かぐやに目線で合図。

ルートを指示。

4階から飛び降りて、その先に空中ブ

ランコがある。かぐや、理解する。

桃太郎、2階席の棚のなかから

あついおしぼりを出して、

かぐやを捕えている鬼に投げつける。

鬼15「あつあつあつ！」

桃太郎「かぐや！ 飛び降りろ！ 受け止める！」

天の邪鬼「ハア？」

かぐや、4階の手すりに登り、

躊躇なく飛び降りる。

桃太郎、2階から走って行って宙に飛び、空中でかぐやを抱きとめる。

その先は、ステージの空中ブランコ。

見事空中ブランコをつかむ桃太郎。

天の邪鬼「しもた！」

武器を取る金太郎。

おしぼり器を持ち上げる浦島太郎。

天の邪鬼「退くで！」

4階から屋根へ、

巨大空中船みたいな潜水艇で逃げる鬼達。

VIPルームからものすごい火が。

金太郎、1階の巨大酒瓶を持ち上げ、

ぶん回して4階へほり投げる。

瓶が割れて中の酒が火を消す。

浦島「うわードンペリもったいない…。」

空中ブランコの桃太郎とかぐや、一息つく。

お互い、目を合わせる。

○ 竜宮城内、地下へ続く階段

巨大な螺旋階段を降りていく、

桃太郎、かぐや、寝太郎を背負う金太

郎、浦島太郎。

浦島 「こんな巨大な地下があったなんて……」。

下の方から、低いなり声が聞こえてくる。

○ 地下牢

年寄りの巨大な竜（竜王）が鎖で繋がれている。

桃太郎、鎖を一刀両断。

竜王 「助かった。鬼達め、無茶しよるわい。ふう。」

ため息だけで突風がおこる。

金太郎 「竜王様なら鬼が島場所をご存知かと思つて、ここまで来ました。」

竜王 「知ってるよ。○海峽の先に、もう使つてない鉾山の島があるだろ、あれ。」

浦島 「そこは潮が読みにくくて、誰も近づかない魔の海域じゃないか。」

竜王 「そうじゃな。海中からいかないと、面倒だな。」

寝太郎 「巨大な潜水艇があるって聞いたよ。」
金太郎 「寝太郎先生！」

寝太郎 「雀のお宿に行つてみな。あそこは雀の工場があるからね。」

浦島 「そこへ行けば潜水艇が借りられるのか。」

桃太郎 「竜王さん、俺たち、鬼が島へ渡りたい。かぐやを殴った奴、殴りにいく。」

かぐや、その言葉にちよつと驚く。

竜王 「昔なら突撃してた所だがなあ。もう年寄りなんで体が動かん。簡単に鎖でしばられちまうし。乙姫とか、ウチのカワイイ子を取り戻してきてくれたら、指名料タダにするよ。」

浦島 「ぜ、ぜひ！」

竜王 「かぐや姫さん、その美貌、ウチで働く気はないかい？ 給料はずむよ。」

かぐや「いや、ないです。月、帰るんで。」
竜王「そうか、帰っちゃうのか。」
桃太郎、寂しそうな顔。

○ 道中、日暮れ

意気揚々と浦島が先頭に。

金太郎は寝太郎を大八車に乗せている。

桃太郎、かぐやは一番後ろ。

桃太郎「なんか変な事になって来たなあ。鬼と戦うつもりはないんだが。」

かぐや「でもあいつ、殴りにいくんでしょ？」

うれしそうな表情のかぐや。

桃太郎「…かぐやは危険を避けて、さつさと天の羽衣とりにいけよ。」

かぐや「なんか冷たいな。」

桃太郎「…あ、月。」

水平線から、半月が。

かぐや「まだ満月じゃないね。満月にならないと、月の力、出ないの。」

桃太郎「月の力？」

かぐや「(手をかざし)こうやって人を止めたりするんだよ。帝も、軍隊も、それで止めたし。」

桃太郎「…」

かぐや「そうだ！ よっ！」

手を地面にかざすと、竹がニューッ。

かぐや「さつきはやっぱ海の中だったからかな。つうことは鬼が島でもやばいかも。」

桃太郎「月には何かがあるの？」

かぐや「ホントのことを言うと、私も知らない。月につく前に、月の使者と大ゲンカしちゃったから。向こうに着いたら、親と会って友達つくって結婚して…。そんなの言われても困るよね。」

桃太郎「結婚？」

かぐや「親の決めた婚約者がいるんだって。」

ショックを受ける桃太郎。

○ 雀のお宿(外)、夜

宴会場では、雀の顔をした踊り子たちの日本舞踊が始まっている。

雀の顔をした女将が迎え出る。

桃太郎「潜水艇、ありますか？」

女将「鬼退治の一行さまで。竜王さまから連絡がありました。鬼達のせいで旅行業界が不振なんですよ。退治なさっていただけると助かります。さ、中へ。」

女将、かぐやにサインを求めますが、かぐや断る。

○ 雀のお宿（中）、広間

雀の顔をした仲居さん達がお茶をいれてくれる。

桃太郎「あの、雀なんすか？人なんすか？」

仲居「ハーフでございます。最近ダブルとも言いますね。」

金太郎、桃太郎、かぐや、浦島、寝太郎が車座に。

金太郎「さて、鬼退治の一行の諸君。」

かぐや「鬼退治には興味ないよ、私は天の羽衣をとりに行くだけ。」

桃太郎「ふりかかる火の粉は払うだろう？」

かぐや「ま、そうだけど。」

浦島「：俺は乙姫ちゃんを取り返せばいいよ。手は貸してもいい。」

桃太郎「俺はまっ先に、頭の酒呑童子を捕らえたい。」

寝太郎は寝たまま。

寝太郎「：。」

金太郎「鬼を解散させるのが俺の目的だ。できただけ、一致団結で行きたい。：浦島。」

浦島「あい。」

金太郎「海に詳しいんだよね？」

金太郎、海図を広げる。

金太郎「この島が、どうやら鬼が島。」

浦島 「(地図を指差しながら)この潮とこの潮がね、ここでぶつかる。満ち引きの度合いによって、潮がどっちに流れるか分からんのだよ。魚に例えると、カレイ？ヒラメ？右左どっち？みたいな。船じゃ難しい。この島にたどり着くのはね。」

寝太郎 「大潮の日まで待つべきだね。」

金太郎 「寝太郎先生！」

寝太郎 「一番水かさの多い大潮の日に、引き潮のタイミングで海中の流れに乗って行けばいい。」

かぐや 「大潮の日…。次の満月ね。」

桃太郎 「あとは敵の数。」

金太郎 「さっきの竜宮城にいたのがざっと百。それにくらべてこっちは、…5人か。」

○ 雀のお宿(中)、宴会場

一同、食事。

ステージでは雀の舞が続いている。

仲居 「今夜はおくつろぎくださいませ。明朝には潜水艇の準備が整います。」

他にも、なまはげ、笠地蔵、文福茶釜、雪女、猿とカニなど、へんな人たちがいる。

○ 雀のお宿内、露天風呂

浦島、超美人のあとをつけて女湯をのぞくと、鶴になってびっくり。

○ 桃太郎の家、縁側、夜

上弦の月はすっかり上空に。

爺、婆、花咲の爺、こぶとり爺などが集まって月見をしている。

婆 「中秋の月から随分経ったけど、この

時期のお月さまはきれいですねえ。」

花咲の爺 「枯れたススキにも花を咲かせてみ

ましょ。ホレ。」

「ススキに灰をかけると鮮やかにススキの花が。」

こぶとり爺「今年の月は特別きれいな気がする。」

爺 「かぐやさんと桃太郎：元気かのお。」

○ 雀のお宿、縁側、夜

同じ月を、桃太郎がひとり縁側でみている。かぐやが来る。

かぐや「眠れないの？」

桃太郎「おじいとおばあの事考えてた。こんな大ごとになると思わなかったから。」

かぐや「私もね、サクッと月に帰れば良かったのよね。」

月をあおぐふたり。

かぐや「私ね、ホントはひとりで出来るってコト言いたかっただけかも知れない。貴族の人も、月の使者も、みんな私をお姫さま扱いするんだもの。そういえば、桃太郎は私を姫扱いしないよね。」

桃太郎「：だって姫っぽくないもん。」

かぐや「なによ失礼な（笑）。：ありがとう、桃太郎。ちゃんと受け止めてくれて。」

桃太郎「あの時、畑、とっさに守ろうとして。」

かぐや「違うよ。さっき鬼につかまった時。

ちよつと疑ったけど、うまく受け止めてくれるとは思ってなかったよ。」

桃太郎「失礼な。俺さまの力を見くびるな。」

かぐや「（笑）。：まだドキドキしてる。：私、

ホントは月に帰りたくないのかなあ。」

桃太郎「なんだよ。わがまま言うなよ。」

かぐや「だって知らない人と暮らしてニコニコなんか出来ないよ！ 友達だって出来たし、月へ帰る理由なんてないもの。」

桃太郎「ホントの親が待ってるんだろ？ 親

と離れるのは辛い事だよ。」

かぐや「なんでそんなに他人事なのよ。」

桃太郎「だ、だってかぐや、宇宙人じゃん。」

人間じゃないじゃん。」

かぐや「宇宙人て。ひどいわ。桃太郎、そんな言い方ないんじゃない？」

桃太郎「…宇宙人は宇宙に帰るのが筋って言うてるだけだよ。」

かぐや「…そう。桃太郎、そんな事考えてたんだ。ごめん。私、桃太郎に『帰るな』って言うって欲しくて、困らせちゃったね。」

かぐや、去る。

桃太郎「かぐや！」

○ 鬼が島内アジト

乙姫たち、無理矢理ステージ衣装を着て踊らされている。

酒吞童子「なんかなあ。ノリ悪いなあ、君ら。」

天の邪鬼、帰ってくる。

酒吞童子「オウ天の邪鬼、どうした？」

天の邪鬼「なんか強い奴らに会いましたわ。」

赤衣着物着た派手な奴。」

鬼16「そ、それってオカッパのごっつい奴

もいてませんでした？」

天の邪鬼「おったおった。」

鬼17「それ、こないだの奴らちやいます？

侍にようけ連行された。」

酒吞童子「なんや？ わしらナメた奴らの話

か？ どの村や。」

○ 裏が浜、朝

雀のお宿の裏手。

竹やぶが割れたかと思うと、地下工場が。そこから出撃する、雀のお宿印の

潜水艇、轟天号（木製）。

中で漕いでいるのは、百人の雀の顔をした仲居たち（つまり人力）。

海へ出る轟天号。

浦島、金太郎、その技術力に驚いている。

轟天号のデモンストレーション。
ミサイル、潜水、ドリルで岩をうがつ。
拍手の一同。
かぐやはずっと上の空。
桃太郎、話し掛けるタイミングを失っている。

そこへ、ひとりの老婆(鬼の格好)が。
老婆 「あんたら鬼退治に行かはるんやつて？」

金太郎 「なにか御用か？」

老婆 「鬼婆と申します。」

金太郎 「鬼！」

まさかりを構える金太郎。
鬼婆、ツノをもぎとる。

金太郎 「ツノがとれた！」

桃太郎 「そのツノ、ニセモノなんだな。」

鬼婆 「左様で。私、鬼が島からのイチ抜け組ですわ。」

桃太郎 「ずっと思ってたんだが、あいつら人だな。」

鬼婆 「なんで分かりはりました？」

桃太郎 「最初から分かったよ。剣を交えても分かった。鬼という種族はいるかも知れんけど、鬼が島の連中は人間だよ。みんな格好とかでだまされてるけど。」

鬼婆 「驚いた！ : あなたのような方がいれば、酒呑童子も鬼呼ばわりされんでも済んだかも知れへん。」

桃太郎 「酒呑童子を知ってるんだな。」

鬼婆 「あれも偽名ですわ。元々あいつは単なる大阪のヤンキーなんや。」

金太郎 「: そういえば、関西弁だった。」

鬼婆 「関東に流れ着いた関西人の集団が、最初の鬼やねん。ま、鬼と呼ばれたんが先か、鬼と名乗ったんが先かは知らんけどな。色んな偏見にさらされたんやな。やかましいあつかましい凶々しいって、本人はそうじゃないのに、関西人いうだけでそういう目で見られるもんやで。面白い事言つて、

とか期待されてな。関西人だけちゃうで。どっかの出身いうただけで簡単にそういう目で見える。」

金太郎「：たしかに、勝手に俺もそう思った。」

鬼婆「そんな地方出身者が集まって、あの島で暴れとるんや。鬼という偏見を利用してな。」

金太郎「しかし、人間とは…。」

桃太郎「鬼なら斬れるが、人なら斬れんのか。」

：俺は、酒呑童子と話し合う為に、鬼が島へ渡るんだ。」

鬼婆「こらまたたいした度胸やな。そんな事考えたはる人がいるとは。」

そこへ、鶴が飛んでくる。

鶴「大変です！ 桃太郎さんの村が！」

鶴、人間（おつう）に変身。

浦島「あ、昨日の温泉美人！」

おつう「おつうと申します。それより、酒呑

童子達が暴れています！ ○○城の向こう

の、川のある村！」

桃太郎「俺の村じゃないか！」

桃太郎、ひとりダッシュ。

○ 雀のお宿

馬が見つないである。

金太郎「馬借ります！」

○ 道中

ひとり走る桃太郎を、後ろから金太郎が馬に拾う。その上空を鶴が追いかける。

○ 雀のお宿

かぐや「馬はもうないの？」
うなづく雀の仲居。

寝太郎「これで見れるよ。」

遠眼鏡を出す寝太郎。

寝太郎「どのへん？」

遠眼鏡主観。

馬で走る二人。城下町。桃太郎の村。

かぐや、遠眼鏡を奪う。

かぐや「燃えてる！」

○ 桃太郎の村、昼、小雨

小雨の降る桃太郎の村。

炎上するいくつかの家。

残った家には、『鬼参上』と赤ペンキで
大書してある。

馬から下りる桃太郎、金太郎。

人間に戻るおつう。

お七の家も燃えている。

泣きじゃくるお七、顔から血を流し呆
然とするヤス。

道ばたに、お爺が倒れている。

背中にバツサリと刀傷。

桃太郎「おじい！」

かけよる。しかしお爺は動かない。

桃太郎「ウソだろ！ 名人級の死んだフリだ

よね！もういい！ スッゴイ驚いたから死

んだフリはもういいって！ ちよつと最近

俺のリアクション小さかったよ！ いや

あ！ 背中 of 傷ホンモノみたいに良くでき

てんなあ！…なあ、死んだフリはやめてく

れよ！」

お婆が出てきて桃太郎に駆け寄る。

泣き出すお婆。

桃太郎「後ろから斬るとは卑怯な！！」

燃えさかる家の向こうから、血まみれ

の刀を持った酒呑童子が現れる。

部下たちは、火炎放射器を天に放って

遊んでいる。

切り掛かる桃太郎。金太郎も続く。

2 SA 1。だが、全く歯が立たない。

金太郎「貴様が酒呑童子だな。」

桃太郎「おまえが酒呑童子か！」

酒呑童子「お前らが噂の奴ら？　たいしたことないのお。」

桃太郎「なぜおじいを殺した！」

簡単にふたりをあしらう酒呑童子。

おつう、羽手裏剣で二人を援護。

何度も何度も何度も切り込む桃太郎。

ついに桃太郎の剣が折れる。

酒呑童子「痛っ、痛…なんじゃ？」

振り向くと、小さなじい（一寸法師）が針で足をつついてている。

酒呑童子「なんやこいつ！」

金太郎「一寸法師師匠！」

一寸「金太郎！　久しぶりじゃな！　鬼の噂を聞いての！」

4 SA 1。

しかしまだだめ。

まっすぐ、折れた剣を振るう桃太郎。

酒呑童子「おんなじ事を何回も！　アホか！」

桃太郎の剣が酒呑童子のツノを飛ばす。

酒呑童子「あっ…」

ツノをかばう酒呑童子。

金太郎「ツノがとれた！…やはり鬼じゃない…」

酒呑童子「なにすんねん！」

結局、桃太郎、金太郎、地面に叩きふせられる。

一寸法師をけとばす。

酒呑童子「生きながら焼いてまえ。」

部下、火炎放射器を構えるが、炎が出ない。

鬼18「あれ。コレ湿って使われんごたる。」

おつう、鶴に変身し、3人をつかまえて空へ逃がす。

酒呑童子「ちっ。ツノ新しいのつくらな。オ

イ、バラすなよ！」

ツノを押さえながら退却。

赤ペンキで他の家にも「鬼」の字を大書する部下。雨で流れて汚い字になる。

桃太郎、空で暴れる。金太郎、止める。

○ モンタージユ

次々にモンタージユ。

満ちていく月。

桃太郎、金太郎、一寸法師、おつう、棺桶の中の爺の前に並ぶ。

かぐや、浦島、寝太郎、村に到着。

かぐや、泣く。

× × ×

満ちていく月。

雀のお宿の庭で、一人剣を振る桃太郎。

裏が浜で一寸法師が金太郎に稽古をつける。

羽手裏剣を投げるおつう、全部ふにやふにやダンスでかわす浦島。

遠眼鏡で鬼が島を観察している寝太郎。

× × ×

金太郎と桃太郎の組手に、剣を教える一寸法師。

一寸法師「おまえさん、毎回まっすぐに向かっていくのお。超ストレートじゃ。」

桃太郎「いかんのか。」

一寸法師「たまには横からいつてみ。人生みたいにな。」

桃太郎「そんな複雑なコトは出来ん。」

一寸法師「超ストレートだけでは玉砕する事もあるだろ？」

桃太郎「…」

金太郎の打込みを横にかわして脇を打つ桃太郎。

一寸法師「そう！ それもアリじゃよ。だが、

真正面から行く事も忘れるな。」

桃太郎「どっちなんだよ。複雑な。」

一寸法師「迷ったら、好きな方で行け。人生のように。」

桃太郎「人生って…。」

一寸法師「人生はお主にまだ早い題材かい？」

お主は人生を生きているだろうか？」

桃太郎「…。」

× × ×

満ちていく月。

浜辺で鬼が島を見ながら、木の上でひ

とりたたずむかぐや。

手をかざすと、さざ波がひとつ止まる。

× × ×

酒盛りする酒呑童子。ツノは新しいのに。酒をつがされている乙姫たち。

村で暴れる鬼達。

× × ×

寝太郎、皆に作戦を授ける。

× × ×

満月。

浜辺のかぐや、手をかざす。

浜辺の波が全て止まる。

○ 裏が浜、満月の夜

静かに潜航する轟天号。

艦橋の、桃太郎、かぐや、金太郎、浦

島太郎、三年寝太郎、一寸法師、おつ

う。

桃太郎、かぐやに話しかけようとするが、かぐやは視線を合わせない。

金太郎「丁度七人で鬼退治か。」

桃太郎「次もあいつに勝てるかどうかは分からない。」

一寸「ラッキーセブンだから、いいことあるよ。」

浦島「引き潮がはじまった。」

潮流が変わる。

潮に流されかかりながらも前へ進む轟天号。

かぐや「何あれ！」

窓から海中を見ると、巨大な蛸。

鎖がついていて、船を引っ張っている。

金太郎「いかん、見つかるかも。」

大蛸、触手をのばし、轟天号を一撃。

轟天号はげしく揺れる。浸水。

水上の鬼。曳航している鎖がゆれる。

鬼15「兄貴、なんか海中のん元気ですぜ。」

鬼16「まあな、ボスのペットいうぐらいやからな。はよボスに会いたいんちゃうか。」

鬼15「この早い潮を鬼が島まで引っ張ってつてくれますからね。」

猛スピードで鬼が島へ向かい始める大

蛸。轟天号、大きくルートをそれる。

浦島「まずい。大きく進路が変わった。」

速い潮に流される轟天号。

海中の岩にぶつかり、へこむ。

水上に出る轟天号。

そこへ10槽の海賊船が。

先頭の男、正しいルートを指差している。

浦島「あれ？、あれ、おれ？」

桃太郎「ほんとだ！」

浦島、外に出て

浦島「おい！ あんた、俺？ 俺、浦島太郎。」

海賊1「浦島？ 俺、浦島百郎。」

海賊2「俺、浦島百一郎。」

海賊3「俺、浦島百二郎。」

海賊4「俺、浦島百三郎。」

次々に現れる海賊はみんな浦島と同じ顔。

浦島「俺の、子孫ってこと？ オイ！浦島

海賊一家かい？」

百郎「よく知ってるな！ どうも仲間みた

いだ！ 鬼が島へむかうのかい？」
浦島 「おうよ！ これから鬼退治だ！ 鬼の宝物、海賊魂がうなるだろ？ 一緒に来いよ！」

百郎 「オッケー！ 続け！」

10 槽の海賊船、先導して鬼が島へ。

○ 鬼が島、門の前

つぶれる寸前の轟天号、船の頭のドリルで鬼が島に突撃。

衝撃に感づく門の中の鬼達。

海賊達、わらわらと船から降りてくる。

7人、門の前に。

とてつもなく高い門。

三年寝太郎、大八車の上から合図。

かぐや、竹を生やす。

浦島、それを切って巨大な釣り竿をつくる。

おつうは鶴に変身。桃太郎、金太郎、一寸法師を足で掴んで門を越えて中へ。桃太郎、金太郎、門の中で鬼達を蹴散らす。

一寸法師、こっそり門の巨大かんぬきに、針の剣に通した糸でかんぬきを結び、針を宙へ投げる。

人間に戻ったおつうが門の上で針+糸を受け取り、門の外の浦島へ。

糸を結んだ釣り竿を、浦島が振る。

巨大かんぬき、釣り上げられて門が開く。

7人、門の前でそろろう。

鬼軍団との闘いがはじまる。

浦島海賊軍団、わらわらと加勢。

闘いながらその群れを突破する7人。

○ 鬼が島内、通路

そこは廢鉱山を改良してつくられた要塞である。

桃太郎、金太郎（背中に三年寝太郎、肩に一寸法師）、かぐや、浦島太郎、おつう、奥へ。

○ 鬼が島内、二股の坑道

二股になっている。左は暗く、右は明るめ。

右の通路から、鬼軍団がこちらへやってくる声がする。

桃太郎「右から鬼たち。」

かぐや「私は左へ行くわ。隠しごとがあると
き、人はそこへ近づかないもの。」

桃太郎「じゃ逆に、右へ行けば酒呑童子にたどり着ける理屈だな。」

金太郎「二手に別れよう。狭い中かたまってもやりにくい。」

浦島「かぐやの説をとる。乙姫のにおいもたぶんこつち。」

右へ桃太郎、金太郎（+寝太郎、一寸法師）。左へかぐや、浦島、おつう。

右の通路で戦闘開始。

一寸「火薬庫、めっけ。」

ダイナマイトなどが。

トロッコに乗って猛スピードで迫る鬼に、ダイナマイトに火をつけ、金太郎が投げつける。

爆発、しかし、天井も崩れてくる。

一寸「意外に脆いの。」

火炎放射器を出してくる鬼たち。

逆に火のついていないダイナマイトを投げて、彼らの手元で爆発させる。

○ 鬼が島内、大広間

宴会中の酒呑童子、天の邪鬼、赤鬼青
鬼姉妹その他幹部。

ダイナマイトの振動が伝わってくる。

酒呑童子「なんじゃあ？」

天の邪鬼「お客さんにしてはでかいノックで
すなあ。」

酒呑童子「おもしろい客やとええな。ちよつと
行ってみるか。」

○ 鬼が島内、牢屋の前

急ぐかぐや、浦島、おつう。

浦島 「ビンゴ！」

牢屋にカワイイ子達が閉じ込められて
いる。

牢屋番を一瞬で倒す浦島。鍵をゲット。

浦島 「乙姫さまー！ー！」

乙姫 「誰？」

浦島 「え？ 覚えてないの？ 竜宮城で指
名したじゃん。名刺も交換したじゃん。」

乙姫 「ごめんなさい。全部のお客様を覚え
きれてないんです。」

浦島、シヨック。

かぐや、周りを探す。

かぐや「宝物しまつてあるとことか、ないで
すか？」

浦島 「たぶん地下の方だと思うよ。それで
下に降りれそう。乙姫、リセットして、こ
れが俺と君の最初の出会いだ。これから君
の中で俺という存在が大きくなっていくん
だ。魚に例えると、イナダ、ワラサ、ブリ
みたいに出世していくんだ。」

乙姫 「？」

浦島 「…決まった。さあ、脱出！」

おつう、皆を誘導。

かぐやはエレベーターへ。

浦島、かぐやのところへ戻ってくる。
浦島 「鬼達の財宝、俺もちよつと興味があ
りまして。」

エレベーター、降下。

○ 鬼が島内、通路

トロツコに乗って鬼達が向かってくる。
桃太郎達、脇道に隠れてやりすごす。
そこは食料庫。

寝太郎 「その粉モノ、持っていた方がいい。
い。」

金太郎 「なぜ？」

寝太郎 「あとで分かる。」

小麦粉の袋をかつぐ金太郎。

○ 鬼が島内、宝物庫

浦島 「あつたあつた。」

山積みの宝物。

浦島 「よくこんだけ集めたなあ。よつぽど
悪さしやがったな。お、打出の小槌。」

宝物を仕分けしながら値踏み。

かぐや、色々探す。

浦島、みつつの宝物を発見。

浦島 「あれ！ 燕の子安貝に、火ネズミの
衣、龍の珠じゃん。この三点セット、アン
タが貴族にとって来たら結婚してやるって
言ったやつだよ！」

かぐや 「ウソ！ ホントにあつたの？ ない
だろうものをわざと言ったのに。」

浦島 「…でも、多分これも偽物だな。」
かぐや 「なんだ。」

○ 鬼が島内、降下するエレベーター内

金太郎 「桃太郎。」

桃太郎 「なに。」

金太郎 「お前、剣が鈍い。どうしちまったん

だ。」

桃太郎 「なんでもないよ。」

金太郎 「いや、何かあるだろ。」

桃太郎 「…実は。いや、なんでもない。」

寝太郎 「かぐや姫の事だろ？」

桃太郎 「なんで知ってんだよ！」

寝太郎 「俺に知らない事はないよ。」

桃太郎 「俺は、分かりやすいものしか分らない。剣なら分かる。まっすぐ行けばいい。とりあうまんじゅうは、ふたつに割ればいい。でも、かぐやの気持ち、全く分らないのだ。何をしゃべっても、全部うまくいかん。俺の気持ち、うまく表現できない。ていうか、思ってるのと逆の事を言ってしまう。…納得いかん。こんな時に、俺、一体、自分で何を考えているんだろう？」

金太郎 「恋だな。」

寝太郎 「恋だね。」

一寸 「恋じゃのう。」

金太郎 「桃太郎。」

金太郎、左右にまさかりを構える。

金太郎 「左は、かぐやが月へ帰らねばならぬ事。右は、お前さんが言いたい事。同時に、お前を襲って来た。どうする？」

桃太郎 「え？ あ、ああ、どうすればいいんだ。」

金太郎 「最初に会った時、お前は簡単に答えを言 っただろ？」

桃太郎 「…剣なら、迷わず真ん中。」

金太郎 「かぐやも、同じ事をしてほしいと思ってる筈さ。」

桃太郎 「…まん中は、かぐや。かぐやに会わなきゃ。かぐや。」

エレベーター、中広間に着く。

酒呑童子が待ち構えている。

天の邪鬼、赤鬼青鬼姉妹が武器を取り出す。

○ 鬼が島内、中広間

酒呑童子「今度は数そろえてきたか？」
指をボキボキ鳴らす。

カッコイイBGM、スタート。
音楽に合わせた、4対3(+1)の激闘。

酒呑童子…巨大な金棒、
天の邪鬼…細身の剣、
赤鬼青鬼…ガンダムハンマー（キルビルのゴーゴータ張のような）で戦う。
桃太郎の剣に迷いはない。
次々に赤鬼青鬼を叩きのめし、天の邪鬼をブン殴る（基本的に桃太郎は殺さない）。

正面から酒呑童子に挑むが、やはり分が悪い。横に体をかわし、横から行く。互角。

横から警戒する酒呑童子に、今度は正面から。

一寸 「やりよるの、若いの。」

○ 鬼が島内、宝物庫

かぐや、寝っころがる。

ふと横を見ると、棚の下の床に天の羽衣が落ちている。

かぐや、天の羽衣を手取る。

フワリと浮く羽衣。

窓から見える満月。見つめるかぐや。

○ 鬼が島内、中広間

激闘は続く。

金太郎のまさかりがふたつとも酒呑童子に砕かれる。ピンチ。

脇で寝かされていた寝太郎、起きる。

寝太郎「ふぁー！ー！。ハクション！」

小麦粉の粉が舞い散る。

寝太郎「みんな伏せて！一寸法師、火を出せ！」

一寸法師が火打石から火を出した瞬間、

粉塵爆発が起こる。

酒呑童子「なんじゃー！ー！？」

中広間の床ごと崩れ落ちる。

全員、下の階へ落ちる。

○ 鬼が島内、大広間

煙の中から、よろよると立ち上がる酒

呑童子。

桃太郎「お爺を殺したのは許せない。許せないけど、俺はお前を殺さない。お前をどうするか、公の場で裁きたいんだ。一度聞きたい。あやまるつもりはないか。」

酒呑童子「アホか！」

口笛を吹く。

目の前の地底湖から、あの巨大な大蛸が現れる。

酒呑童子「明石の大蛸、八ちゃんです！！

八ちゃん、やつつけて！！」

しかし、八ちゃんは暴れて触手を鍾乳

洞にぶつけまくり。

天井が崩れてくる。

○ 鬼が島外観

要塞の崩落が始まる。一部崩れる。

○ 鬼が島内、宝物庫

かぐや「なにー！ー！？」

宝物庫ごと崩れていく。

○ 鬼が島内、大広間

次々に崩れていく天井。

落ちてくる、かぐや、懐に宝物を入れた浦島、おつう。

桃太郎 「かぐや！」

かぐや 「桃太郎！」

かぐやの頭上に巨大な岩が。

桃太郎、かけつけて岩をまっふたつに。

桃太郎 「この危機を脱出できたら、話したい事がある。」

かぐや 「…いいよ。」

浦島 「一寸法師！ これ、欲しかったですよ！」

浦島、打出の小槌を振る。

しかし一寸法師の股間のみ巨大化。

浦島 「おお？」

一寸 「ワシはこれでも良いが、浦島、小槌が反対じゃ。」

打出の小槌、反対側で振る。

しかし、股間が巨大なまま巨大化する一寸法師。

一寸 「ワハハ。茶柱が立つより縁起がよいぞ。」

7人そろう。

酒呑童子。

八ちゃんは勝手に暴れている。

7人 vs 酒呑童子。

桃太郎の打ち込み、金太郎の怪力、浦島のカンフー、かぐやの竹槍、一寸法師の針、おつうの羽手裏剣。

酒呑童子、次第に押されていく。

酒呑童子の渾身の打込みを、桃太郎は脇へかわす。絶好のチャンス。

しかし桃太郎は脇腹の前で刀を止める。

一寸 「お見事！」

酒呑童子 「…。」

桃太郎 「鬼婆さんに会ったよ。君らがほんとの鬼じゃない事も聞いた。…言われて、俺

も考えてみた。俺もひよっとしたら、気の会う仲間を見つけて、頼られたら行動を起こしたかも知れない。今の俺だって、恐くて、仲間がいて、行動を起こしている。」

酒呑童子「…。」

桃太郎「もう一度聞く。あやまるつもりはあるか。」

酒呑童子「…弱いやつほどよく吠える。弱いやつほど集まりたがる。弱いやつほど、後にはよう引けん。」

桃太郎「…。」

酒呑童子、桃太郎の股間を蹴り、転がって逃げて、

酒呑童子「お腹空いてるやる！？こいつら食べ！」

陸に上がった八ちゃんの足が7人を攻撃する。

しかし八ちゃん酒呑童子をさらって食べてしまう。

酒呑童子「なんで……！？」

ますます暴れる八ちゃん。

また天井が崩れる。

一本の足を、桃太郎が受け止める。更にもう一本の足を金太郎が受け止める。

更に別の足をおつうがつかむ。

一寸法師もつかむ。

浦島もつかむ。

寝太郎も起きてつかむ。

かぐやもつかむ。

7人がそれぞれ一本ずつ足をつかむ。

足はあと残り一本。

その一本でも暴れる八ちゃん。

突然、胃袋を脱出した酒呑童子が残りの足をつかむ。

酒呑童子「このまま死んだら地方出身者はわるもんばかりになるやんけ……」

「！」
しかし、天井から落ちて来た岩が酒呑童子の頭を打つ。ツノがふたつとも砕け散る。

桃太郎「酒呑童子！」

金太郎「桃太郎！ この蛸をブッタ切れ！」

かぐや「桃太郎！」

桃太郎、ダッシュ。

ぬるぬるした蛸に滑りながらも頭まで駆け上がり、宙に舞う。

一気に、上空から地面まで唐竹割り！

八ちゃん、まつぶたつ。

どう、と音を立てて崩れ落ちる。

要塞の崩落は止まる。

○ 鬼が島外観

空が明るくなり始めている。

満月が水平線に沈もうとしている。

すっかり崩壊した鬼が島要塞。

鬼の潜水艇に乗り込んでいる人質達。

宝物を運んでいる海賊達。

連行されてる鬼達（その中に担架で運

ばれている酒呑童子）。

それを見ている7人。

金太郎「酒呑童子が最後に言ったけど、わるいやつらばっかじゃないと思う。きちんと話を聞いてからしかるべき裁きにかけるよ。
：桃太郎、お前の希望通り、侍の部隊に推薦しようと思うが。」

桃太郎、話を聞く半ばからダッシュ。

かぐや姫が、月の光を受けて天へ帰ろうとしている。

桃太郎「かぐや！」

かぐや、天の羽衣を着ていて、宙に浮

く。

かぐや「…。」

桃太郎「…。」

浦島、気を利かせて、三種の神器を桃太郎に投げる。

浦島 「かぐやが、貴族にとってこいつていつた奴だ。」

桃太郎 「でも、これにせもんじゃん。」

かぐや 「なんで分かるの？」

桃太郎 「ウチの村でこれ作ってたよ。」

かぐや 「…馬鹿ね。私がこれを受け取ったら結婚するって話知らないの？」

桃太郎 「…嘘、嫌いなんだろ。」

かぐや、うなづく。

かぐや「覚えてたんだ。…貴族のみなさんは、みんな嘘ついて宝物をほんものだって言ったの。誰も私にほんとの事言ってくれなかった。宇宙人は、宇宙に帰ります。」

桃太郎 「月に行かないで。」

かぐや 「…。」

桃太郎 「ほんとの事を言うよ。ほんととは、あの時これが言いたかった。またふたりで月見がしたい。お月見するたびに君を思い出すなんて嫌だ。」

かぐや 「…。」

桃太郎 「帰るな。俺、お前が好きだ。」

かぐや 「…超ストレート。」

天の羽衣を脱ぐかぐや。

力を失って落ちてくる。

かぐや 「受け止めて。」

桃太郎、最初と同じく彼女を受け止める。

満月バック。

ふたりはキスをする。

天の羽衣が、天空高く飛んでいく。

浦島 「んー、魚に例えると、目の出た鯛だな。」

一寸 「しかも、二尾ならべとくか。」

浦島 「めでたい、めでたい。」

満月を背景に、抱き合う桃太郎とかぐや。

○ 桃太郎の村、昼間

正月のテーマ。このシーン音楽のみ。

村人が集まって、7人を迎える。

婆と抱き合う桃太郎。婆と抱き合うかぐや。

お七とヤスも迎える。

お爺の霊前に報告しようとした瞬間、お爺が生き返って桃太郎仰天。お婆の入れ歯が飛ぶ。お爺、してやったりの大爆笑。

矢倉を組んで、祭りが始まる。

乙姫達、雀の宿のダンサーが舞う。

浦島一家も踊る。

花咲か爺さんが桜をさかせ、

こぶとり爺さんがこぶをジャグリング。

雀の女将、仲居たちが料理をふるまう。

善良な『鬼』達が、『鬼ウマ！明石のた

こ焼き』の屋台を開いている。集まっ

た子供達にツノをとってびっくりさせている。

鬼が島の海。

天の邪鬼が、一人で泳いでいく。

ツノをとるが、下には本物のツノ。

人間のメイクを取って、本物の鬼の姿に…。

子供二人が、一個のたこ焼きをとりあっている。

桃太郎通りかかり、子供たちに、もう一個たこ焼きをあげる。

桃太郎、走っていく。

金太郎、浦島太郎、三年寝太郎、一寸法師、おつう。

桃太郎 N 『世界は複雑で、理不尽で、オレが全部を分るには広すぎる。この畑のこと、この村のこと、ここに住む人のこと。それまで俺はその枠から出ようとしてもしなかった。その日、オレは人生でマックスわけのわからないものに出会った。恋だ。』

走る先には、かぐや。

祭りは最高潮。

爺 「今年も正月を迎えられた。とりあえず、めでたし、めでたしかの。」

7人、踊る。

みんな踊る。地上の極楽のように。

エンド・ロール。